

若者による地域の「見どころ」把握に関する 基礎的研究

— 高大連携プログラムを通じた日野市豊田地区における事例 —

土屋 薫*・須賀由紀子**

要 約

本研究は、地域を異化する訪問者の視線を、地域住民へ豊かさの実感として還元するしくみづくりについて検討した。住民が把握している地域の価値と訪問者の感じるものとの間にどれだけ差異があるのかについてとらえるために、本研究は、1) 訪問者として大学生と高校生を位置づけ、2) 当該地域の持つ資源に触れる「まち歩き」を実施し、3) その際にSD法を用いて景観評価を行なった。他日にその成果として、訪問者側の視点を提供できるという点で、社会関係資本を介した循環型地域づくりに向けて1つの端緒となったと言える。ただそれを本格的に実現するためには、同様の実験的試みをあらためて地域住民を対象に行う必要がある。

キーワード：循環型地域づくり、社会関係資本、SD法

1. はじめに

1-1 研究の背景

本学現代社会学科では、その前身であるライフデザイン学科の時代から「フィールドワーク」をキーコンセプトの1つとしてカリキュラムを展開してきた。文字通り「現場に出て学ぶ」ことを実践していく上で、地域が持つ様々な資源や社会関係資本の把握は重要な意味を持つ。

本学が位置する千葉県流山市は、柏市、松戸市、江戸川、野田市に囲まれた東葛地域にある。また2005年8月につくばエクスプレスが開業したことで都心との時間距離が大幅に短縮され、東京のベッドタウンとして開発が加速した。こうした開発行為で減少した緑を回復させることを目指し、

市は「グリーンチェーン（緑の連鎖）」という考え方を導入して、「流山グリーンチェーン戦略」と名づけた施策を展開してきた。この「流山グリーンチェーン戦略」は、流山総合運動公園と市野谷の森（通称「おおかの森」）に代表される、市内の大規模緑地を基点として、各戸の庭へと続く連続的な緑の景観を形成しようとするものである。またそのことで、夏場には大規模緑地で蓄えられた冷気を市街地までつなげ、ヒートアイランド現象の抑制を目指そうとするものである。具体的には「体感温度」を抑える上で、各戸で道路からの輻射熱を防ぐ高木を植えることと、風の通り道をつくることに力点が置かれている。

この「流山グリーンチェーン戦略」では、緑化とともにコミュニティ形成も意識されている。住民各自の庭および近隣の庭や街路樹、近隣緑地を一種の共有物と認識して協力しあうとき、緑化による生活環境の改善とともに、コミュニティ形成も促進される、という設計思想である。ただこ

2017年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学

** 実践女子大学 現代生活学科教授 余暇、生活文化論

で重要なのは、住まい手の「体感的な快適性」が目標とされているので、緑化にどれだけの効果があるか、その基準が必ずしも定かではない、という点である。

そこで流山市では、2006年から江戸川大学に委託して「熱環境調査」を行い、市内要所の気温分布について定点観測するようになった。その際、予算の関係もあり機器の設置数には限界があるので、夏季には「移動観測」が実施されてきた。2006年当時、移動観測は学科内の環境学研究室で実施されていたが、2008年からは、神奈川県立大師高校の生徒を招いて、高校生と大学生とで協同して観測を行うようになった。これが本学科における「高大連携」プログラムのはじまりである。もちろんそこでは常に、大学における学びを大学生が高校生に伝えるという姿勢が中心に据えられていた。

本学科レジャー社会学研究室でも、環境モニタリングを背景とした住民のライフスタイル構築について検討する視点で、2008年から2013年まで、本学科環境学研究室および日本大学文理学部地理学科気候環境研究室と成果を共有する形でプログラムに参加してきた。同じエリアを異なる研究領域から照射して立体的に捉えようとする試みとしてである。しかしながら2014年からは、本学科環境学研究室の改変に伴い、また「高大連携」として参加対象としてきた神奈川県の総合学科の高校生への負担を軽減する上で、八王子大学セミナーハウス周辺での実施に変更した。ただ大学周辺地域からは離れたものの、基本的な方法論は変わらず、住民のレジャー活動・地域づくりに関わる観点から地域の持つ資源や社会関係資本を把握するプログラムと位置づけて参加している。さらに2017年は、八王子に近く、研究・教育領域が近接していることもあり、実践女子大学の地域・生活文化研究室と協働してプログラムを実施することとなった。

1-2 研究の目的

ある地域が持つ価値は、その住民が最もよく理解しているという意見に異論はない。ただし日

常化することによってその恩恵を恒常的に被るとしても、その価値自体に対する住民の注目度が下がることは否めない。またそのことは、地域の価値を保全する上で妨げとなりかねない。その点、こうした地域の価値を高める資源や社会関係資本の把握を目指す上で、地域の「部外者」の存在は重要な意味を持つ。レジャー活動という点から見れば、観光客がその「部外者」にあたることになるが、観光地や観光行動に直接結びつかなくても、一般に「訪問者」は訪れた地域を異化する。住民とは異なった視点で地域を捉え、それに沿った行動を取るとともに、そのことにより、地域住民に違和感を通じた意識変容をもたらす、という意味である。

本研究は、こうした動きに着目し、地域を異化する訪問者のフィードバックを用いて、住民が地域の豊かさを実感しライフスタイルへ還元するしくみづくりについて検討するものである。

「旅の恥は掻き捨て」ということわざにもある通り、本来訪問者は訪問先を一過性のものとしてしかとらえていない。表面的であるか、本質まで届く洞察かは別として、その場所の価値を「見どころ」として瞬時に感じ取るのが訪問者たる所以である。そこで本研究は、住民が把握している地域の価値と訪問者の感じるものにどれだけ差異があるのかをとらえ、訪問者の感覚を住民へ還元する手法について検討することを目的とした。

2. 実験の概要

2-1 研究の方法

(1) 地域を異化する訪問者の設定

本研究では、地域を異化する訪問者として、以下の3点から大学生を位置づけた。すなわち第1に、本来地域とは直接対応関係の無い内容（大学における学び）を地域へフィードバックできる可能性があること、そして第2にその学び自体が地域への学生の容易な同化作用の楔となると考えられること、また第3に恒常的なしくみづくりを指向するに際して、基本的な情報の引き継ぎを前提としつつ定期的に学生の総員が入れ替わること、

という理由からである。

(2) 地域の選定

これまでの活動の蓄積から、東京都日野市豊田地区、とりわけ二中地区と呼ばれる地域を取り上げた。ここでは、日野市企画部地域協働課によるアクションプログラムの一環として、実践女子大学生活科学部現代生活学科の地域・生活文化研究室の2016年の活動で、大学生と地域住民とで一緒にまち歩きが行なわれ、地域を「まったり」と「わくわく」の2軸から分け、地域特性を反映した地域マップが作成された(図1, 図2)。そこで、地域住民がとらえたこうした特性を訪問者である学生がどのように評価するのか、そしてその結果をもう一度住民に還元する機会を想定して、この地域を選定した。

(3) 地域の評価手法

ここでは、2016年に東京都日野市豊田地区で地域マップが作成された際に、住民が評定した空

表1 準備作業日程

日程	作業内容
2017年3月2日	第1回現地踏査
3月21日	KJ法によるキーワード抽出
4月22日	第2回現地踏査
5月3日	形容詞対の抽出

間評価との違いを明らかにするために、SD法を用いて学生に地域を評価させた。SD法の項目は、現地踏査の上、KJ法を用いて、現地を捉えるキーワードを押さえるとともに、そのキーワードをもとに2016年の地域マップを構成する「まったり」と「わくわく」2軸に関連する形容詞対8項目と、さらに関連の考えられる「自然」と「地域性」に関わる8項目の計16項目の形容詞対を抽出した(表1, 表2)。

(4) 評価対象地点の設定

当該エリア(日野市二中地区)は南北約1.8km・東西約1.4kmにわたる面積に及ぶので、

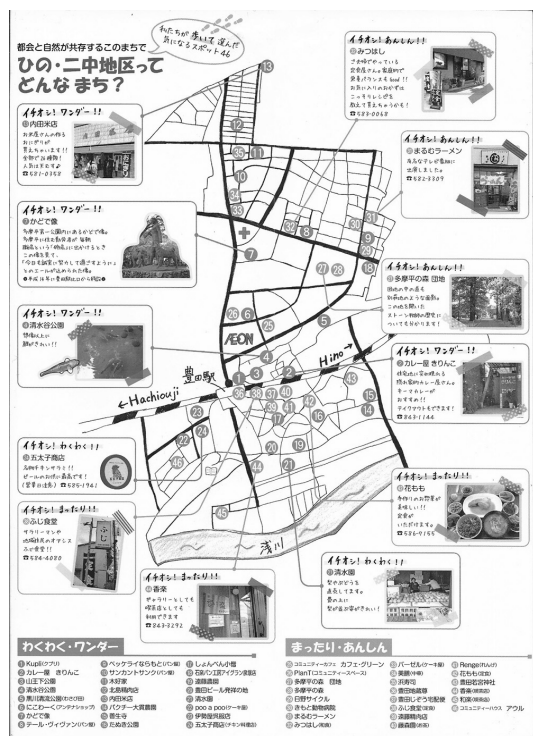


図1 「プランニングプロジェクト」マップ



図2 まったりスポットとわくわくスポット

表2 評価軸と形容詞対

評価軸	形容詞対
まったり	静かな／にぎやか
	落ち着く／居心地悪い
	ほのぼの／せかせか
	のんびり／いそがしい
わくわく	楽しい／つまらない
	鮮やかな／地味な
	いい匂い／臭い
	わいわい／おだやか
自然	涼しい／暑い
	美しい／汚れている
	うるおいがある／乾いた
	ざわざわする／しーんとした
地域性	気に入る／気に入らない
	社交的な／内向的な
	懐かしい／新鮮な
	のどか／さわがしい

エリア内道路の総延長を考え、評価の対象地点を10地点に絞った。また、JR中央線によって大きく南北に分断されているので、JR中央線の南北からそれぞれ5地点ずつ抽出した(図3, 図4)。



図3 北コース

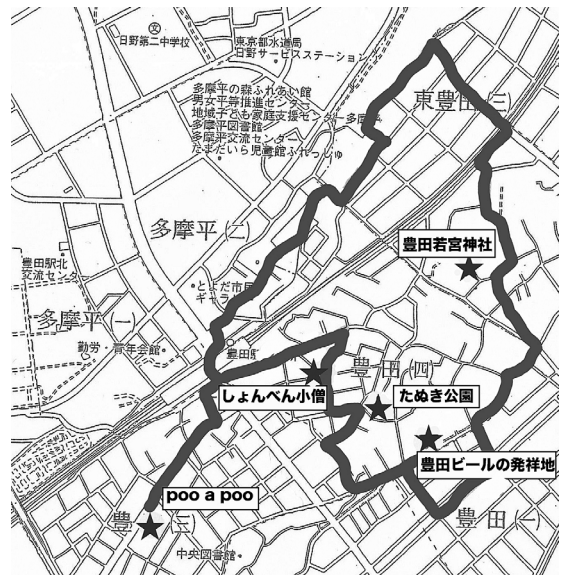


図4 南コース

このうち北部の「アイグラン」はスペイン製石窯で焼き上げる人気のパン工房で、南部の「poo a poo」は駅にほど近い瀟洒(しょうしゃ)な白亜のケーキ店である。また、北部・南部でそれぞれパワースポットとされる「多摩平の森」と「豊田若宮神社」をはじめ、特徴的な景観が学生たちによってバランスを考慮して選ばれた。

(5) 回答者(被験者)の選定

回答者(被験者)は江戸川大学男子学生2名と実践女子大学学生4名の6名に加え、高大連携プログラムに参加した神奈川県総合学科高校生(男子3名, 女子7名)の計16名である。高大連携プログラムの場を採用したのは、訪問者としての大学生が自身の感覚を住民へと還元する際に、当事者としての視点を持続させることを意図したからである。本学科における高大連携は常に、大学生がホストとして高校生を迎え、自分たちの学びを自身の手で高校生たちに伝える形を取ってきた。もちろんこの手法は、大学での学びを深める意図を持っているが、ある意味で大学生を地域のインタープリターとして高校生の前に立たせることになる。ホストとしてゲストを迎える立場に立たせること、その後さらに今一度、自分が訪問者

として地域住民のまなざしと向かい合うとき、異化と同化のあいだで揺れる感性こそが、住民に地域の豊かさを再認識させる契機となるのではないだろうか。そうした意味を込めて「訪問者」としての高校生を回答者（被験者）に加えた。グループとしては、地域外の若者ということになる。

(6) 実験の手順

実験の手順としては、日野市役所職員と地元環境 NPO メンバーの方から、日野市の地域特性と自然特性に関して話題提供をしていただき、地域を見る視点について被験者にイメージを持ってもらった上で、コースに沿ってまち歩きを行い、その途中のポイントで、あらかじめ用意された形容詞対に沿って5段階で評定をつけてもらった。

3. 実験の結果

まず形容詞対の得点について見てみると、図5ようになる。上から4項目（静かな／にぎやか、

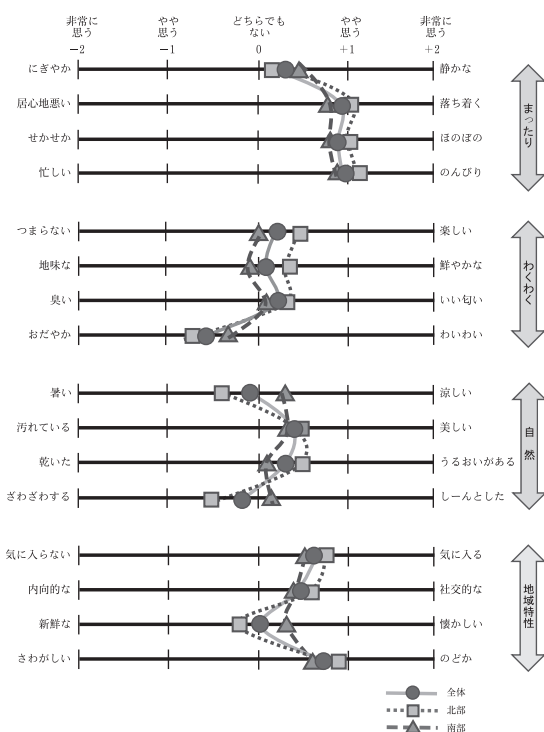


図5 全体の得点（平均点）

落ち着く／居心地悪い、ほのぼの／せかせか、のんびり／いそがしい）が「まったり」をとらえるための設問で、次の4項目（楽しい／つまらない、鮮やかな／地味な、いい匂い／臭い、わいわい／おだやか）が「わくわく」をとらえるための設問となっている。また次の4項目（涼しい／暑い、美しい／汚れている、うるおいがある／乾いた、ざわざわする／しーんとした）が「自然」をとらえるための設問で、最後の4項目（気に入る／気に入らない、社交的な／内向的な、懐かしい／新鮮な、のどか／さわがしい）が「地域性」をとらえるための設問となっている。

これだけでは得点の意味わかりにくいので、「まったり」「わくわく」「自然」「地域性」という4つの軸に関わる得点の南北両エリアのそれぞれの平均点をプロットしたのが図6である（どちらでもない=0）。

「まったり」の全体の平均点が0.79点なのに対して、北側エリアが0.86点、南側エリアが0.73点ということは、北側エリアの方が南側エリアよりも「まったり」の度合いが高いことを意味する。同様に、「わくわく」の全体の平均点が-0.01点なのに対して、北側エリアが0.08点、南側エリアが-0.09点となっている。これは北側エリアの方が南側エリアよりも「わくわく」の度合いが高いことを意味する。同様に、「自然」の全体の平均点が0.11点なのに対して、北側エリアが-0.11点、南側エリアが0.23点となっている。これは

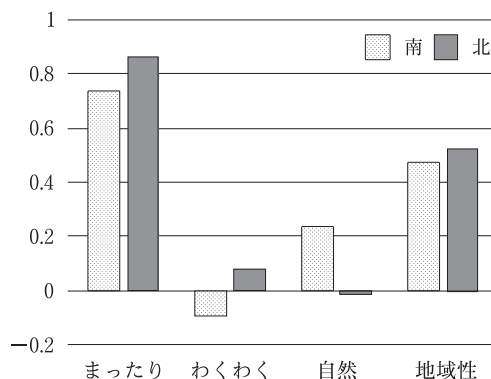


図6 項目別評定平均値の南北差（どちらでもない=0）

南側エリアの方が北側エリアよりも「自然」の度合いが高いことを意味する。同様に、「地域性」の全体の平均点が0.49点なのに対して、北側エリアが0.53点、南側エリアが0.46点となっている。これは北側エリアの方が南側エリアよりも「地域性」の度合いが高いことを意味する。

つまり、4つの軸のうち、「自然」以外は北側のエリアの方が南側のエリアよりも評価が高くなっているのである。

また、全10地点に関して、「まったく」と「わくわく」の2軸が比較できるように、2軸の項目のみの評定平均値（それぞれ4項目ずつ）の総計をプロットした作業図が図7である。これを見ると、全10地点のうち9地点までが「まったく」の比率が高くなっていることがわかる。また北側エリアの「アイグラン」前の景観が唯一「わくわく」の比率が高いのは、商業施設の前だからなのか、「おしゃれで美味しそうなパン」という扱う商品の問題なのか、バリエーションと扱う量の多さに起因するのかは定かではない。これは回答者（被験者）の経験や文化的背景に関連してくるこ

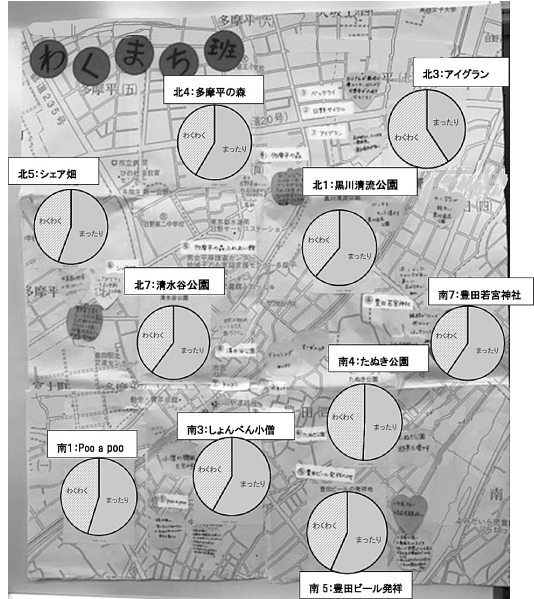


図7 「まったく」と「わくわく」の2軸による評価

とも考えられる。

さらに、因子分析を試みると表3の結果となった(Cronbackのアルファが0.743, Kaiser-Meyer-

表3 因子負荷量 (16項目)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
のんびり／忙しい	.950	.004	.010	.177
ほのぼの／せかせか	.824	.002	.127	.311
わいわい／おだやか	-.653	.135	-.312	.209
のどか／さわがしい	.476	.214	.268	.135
落ち着いた／居心地悪い	.440	.439	.257	.385
うるおいがある／乾いた	.435	.086	.090	.364
気に入る／気に入らない	.212	.745	-.120	.071
美しい／汚れている	.190	.686	.302	.089
楽しい／つまらない	.106	.677	-.069	.030
社交的な／内向的な	-.159	.599	-.249	.116
鮮やかな／地味な	-.160	.532	-.082	.023
いい匂い／臭い	.029	.492	-.001	.309
ざわざわする／しーんとした	-.114	.317	-.723	-.022
静かな／にぎやか	.433	.020	.648	.175
懐かしい／新鮮な	.061	.063	-.038	.622
涼しい／暑い	.196	.133	.142	.465

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

Olkin の標本妥当性の測度は 0.735, 有意確率は 0.000)。4つの因子による説明力は、52.44%であったが、当初想定していた評価軸のうち、「まったり」の方は因子1として3項目（ほのぼの、のんびり、落ち着く）が関わっており、「わくわく」の方も因子2として3項目（楽しい、鮮やかな、いい匂い）が関わっているが、他の因子構成は必ずしも想定した通りではなかった。ただし「まったり」の対にあたるものとして「わいわい」が入ってきている（因子負荷量が-.653と負の値になっている）ところは、2軸が対象的であること意味しており、2016年度マップの概念構成がある程度有効であることがわかった。ただし、「しーんとする」と「静かな」が同一因子となっていることを考えると、語彙力の問題も直接回答に影響していることがわかった。これが年齢によるものなのか、

びり、落ち着く）が関わっており、「わくわく」の方も因子2として3項目（楽しい、鮮やかな、いい匂い）が関わっているが、他の因子構成は必ずしも想定した通りではなかった。ただし「まったり」の対にあたるものとして「わいわい」が入ってきている（因子負荷量が-.653と負の値になっている）ところは、2軸が対象的であること意味しており、2016年度マップの概念構成がある程度有効であることがわかった。ただし、「しーんとする」と「静かな」が同一因子となっていることを考えると、語彙力の問題も直接回答に影響していることがわかった。これが年齢によるものなのか、

表4 共通性

項目	初期	因子抽出後
静かな／にぎやか *1	.555	.639
落ち着く／居心地悪い	.620	.601
ほのぼの／せかせか	.833	.793
のんびり／忙しい	.843	.933
楽しい／つまらない	.441	.476
鮮やかな／地味な	.455	.316
いい匂い／臭い	.405	.339
わいわい／おだやか	.536	.585
涼しい／暑い *2	.296	.293
美しい／汚れている	.535	.606
うるおいがある／乾いた	.365	.337
ざわざわする／しーんとした *3	.512	.637
気に入る／気に入らない	.622	.619
社交的な／内向的な	.506	.460
懐かしい／新鮮な *4	.249	.396
のどか／さわがしい	.487	.362

*1と*3は16項目の因子3、*2と*4は16項目の因子4の項目

表5 因子負荷量（8項目）

項目	因子1	因子2
のんびり／忙しい	.904	.134
ほのぼの／せかせか	.903	.147
わいわい／おだやか	-.616	.126
気に入る／気に入らない	.093	.832
楽しい／つまらない	.035	.663
社交的な／内向的な	-.274	.641
美しい／汚れている	.185	.609
落ち着く／居心地悪い	.503	.533

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

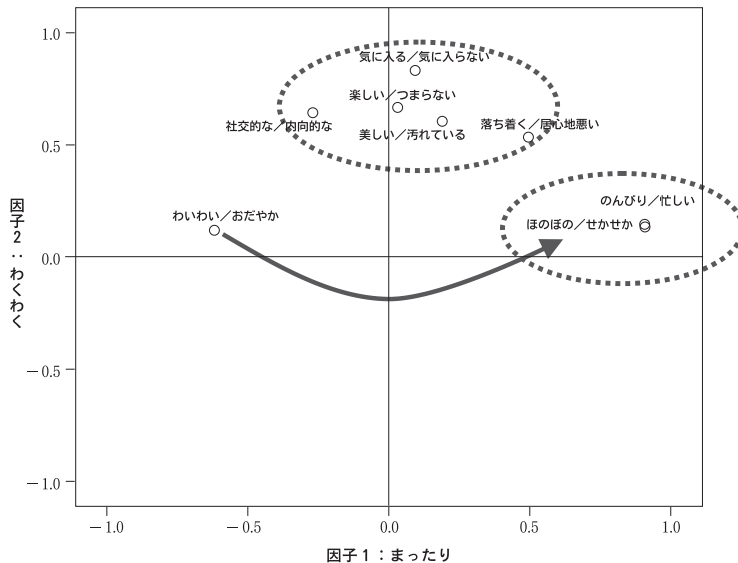


図8 2因子から見た8項目の位置づけ

今後検討する余地がある。

また本研究では、実践女子大学の地域・生活文化研究室のこれまでの取り組みを活用して、「まったり」と「わくわく」という2軸(2因子)による地域の特徴把握を試みてきたが、この2因子の内容を精査するため、全16項目の中から因子3と因子4に関わる4項目と、共通性の低い6項目(0.4未満)を取り除いて8項目にトリミングして(表4)、分析を試みた。

その結果、8項目では2つの因子で57.96%の説明力のあることがわかったが、「落ち着く／居心地悪い」の1項目のみ因子2に入れ替わっていた(Cronbackのアルファが0.670, Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.708, 有意確率は0.000)。この8項目の方の因子2に「落ち着く／居心地悪い」が入ってきたのは、「わくわく」の要素として「サードプレイス」的な意味づけに焦点が当たったものと考えられる(表5)。

さらにこれらの回転後の因子得点を2次元にプロットして得られたのが、図8である。8項目の因子1と因子2を、そのまま「まったり」と「わくわく」という2軸としてとらえると、項目としての「わいわい／おだやか」の因子負荷量が負で(-0.616)反転項目と考えられるので、8項目が

表6 地点集約データの因子負荷量(8項目)

項目	因子1： まったり	因子2： わくわく
のんびり／忙しい	.965	.174
ほのぼの／せかせか	.964	.248
社交的な／内向的な	-.848	.339
わいわい／おだやか	-.820	-.022
気に入る／気に入らない	-.126	.931
落ち着く／居心地悪い	.491	.787
美しい／汚れている	.126	.528
楽しい／つまらない	-.320	.430

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

2軸に収斂していることがわかる。

またデータを地点ごとに集約して上記8項目で因子分析をし直すと、やや妥当性に問題はあるものの(Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度が0.426)、2因子で72.31%の説明力が確認された(有意確率は0.000, 表6)。因子構成は「社交的な／内向的な」という項目が「わくわく」軸から「まったり」軸に移行したのみであるが、因子負荷量が負で(-0.848)反転項目なので、「内向的な」という要素の反映であると考えられる。すなわち、因子1と因子2を、そのまま「まったり」

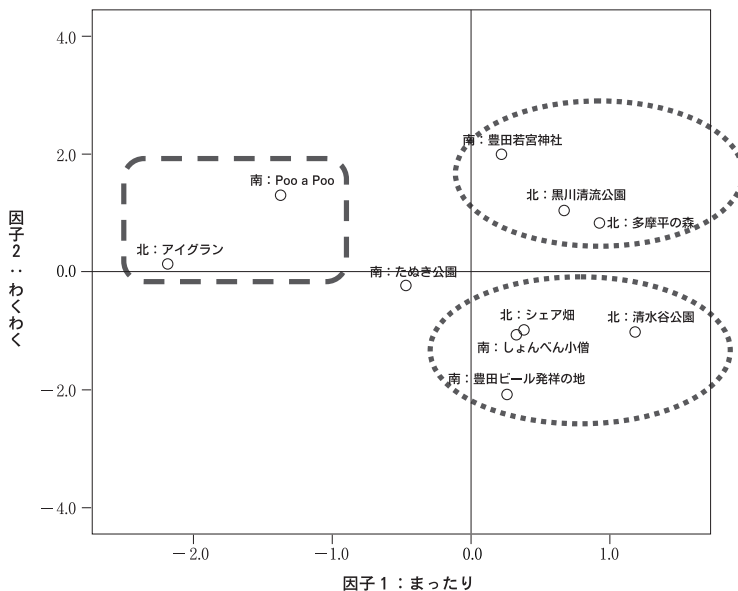


図9 2因子から見た10地点の位置づけ

と「わくわく」として2軸に位置づけることができる。

ここから回転後の因子得点を2次元にプロットして得られたのが、図9である。ここからわかることは、店舗周辺と緑地周辺では確実に景観評価が異なること、また同じような緑地だとしても、「わくわく」度の高低で2分されることである。そしてそれらの差がどこに起因するのか確認していくことが、ターゲットに応じた「見どころ」を把握・構築していくことにつながるだろう。

4. 今後の課題

本研究は、地域を異化する訪問者の視線を、地域住民へ豊かさの実感として還元するしくみづくりについて検討してきた。住民が把握している地域の価値と訪問者の感じるものにどれだけ差異があるのかをとらえるという点では、本研究は、訪問者側の視点を提供するという点でその端緒となったと言える。ただそれを本格的に実現するためには、同様の実験的試みをあらためて地域住民を対

象に行う必要があるだろう。

参考文献

- 土器屋由紀子・森島済, 2010,『フィールドで学ぶ気象学』成山堂書店
- 猪瀬怜子・栗田和弥・畔柳直美・宮川浩・麻生恵, 2002,「阿蘇地域における草原景観の分類とその景観イメージに関する研究」『ランドスケープ』65(5)
- 囊重南・油井正昭・古谷勝徳, 1995,「スライドによる中・高・大学生の眺望景観に対するイメージと評価に関する研究」『ランドスケープ研究』58(5)
- 三宅諭他, 1997,「景観イメージの合意形成手法に関する研究——CCDカメラを用いた都市景観モデルの評価特性と景観趣味レーションワークショップへの応用——」『日本建築学会計画系論文集』491
- 杉野拓矢, 2016,「V 部会報告 3 校外連携部会」『研究紀要』第12号, 神奈川県高等学校総合学科教育研究会
- 土屋薫, 2015,「オープンガーデンにおける交換過程に関する考察—着地型観光における交流の構造把握に向けて—」『江戸川大学紀要』25号
- 土屋薫, 2013,「着地型観光支援ツールとしてのデジタルマップの可能性—観光情報とルート選択に関する考察」『江戸川大学紀要』23号